

小中一貫校児童生徒の身体的差異が共用スペースに与える影響に関する研究

正会員 ○西岡 大介 \*  
同 横山 俊祐 \*\*  
同 徳尾野 徹 \*\*\*

小中一貫校 共用スペース 身体的差異  
家具寸法 家具配置

1. はじめに

近年、公立学校において小中連携・一貫校が急激な増加を見せている。その中でも、施設一体型の小中一貫校は、小学段階と中学段階の接続という面ではより可能性があるものと期待でき、小・中学校における異学年の交流や教師と生徒児童との交流、教師間の交流がより発生しやすいと言える。しかし、そういった交流が行われる上で小中一貫校では、児童生徒が9年間という長い期間生活するために、彼らの成長による身体的差異や運動能力の違いが大きく表れ、それによって家具やしつらえに関して問題が生じる。特に、異学年交流が行われている共用スペースや時間差共用がなされている特別教室などは、そういった問題に対して特に留意されていなければならない。そこで、本研究では小中一貫校の共用スペースにおいて生じる、児童生徒の身体的差異による家具やしつらえの問題への対処法や共用スペースの多様性について調査し、それが学校での生活に与える影響を明らかとすることを目的とする。調査は対象校3校(TDR, ST0, TBS)に対してヒアリング調査、および家具の実測、家具の使われ方の観察調査を行った。

2. 共用スペースの分類

共用スペースは共用の仕方によって、「同時共用の場」と「時間差共用の場」の2種類に大別でき、それに共用の形式がフォーマル[F.]なものか、インフォーマル[I.F.]なものかという指標を加えて、各対象校の共用スペースを分類する。同時共用の場では実際は使われていない、あるいは高学年の専有という場合が存在する可能性があり、時間差共用の場では身体的差異による家具などへの問題をどのように解決しているかを見る。

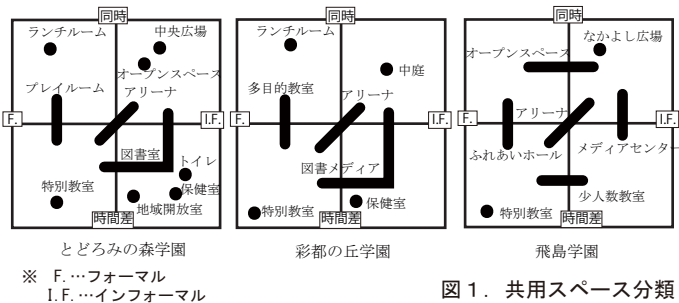


図1. 共用スペース分類

3. 利用状況

各教室の分け方はさまざまで、TDRでは理科室が小・中の区切りで、音楽室は前期・中後期の区切りとなっており、ST0では、小・中の区切りで分けられている。また、TBSで

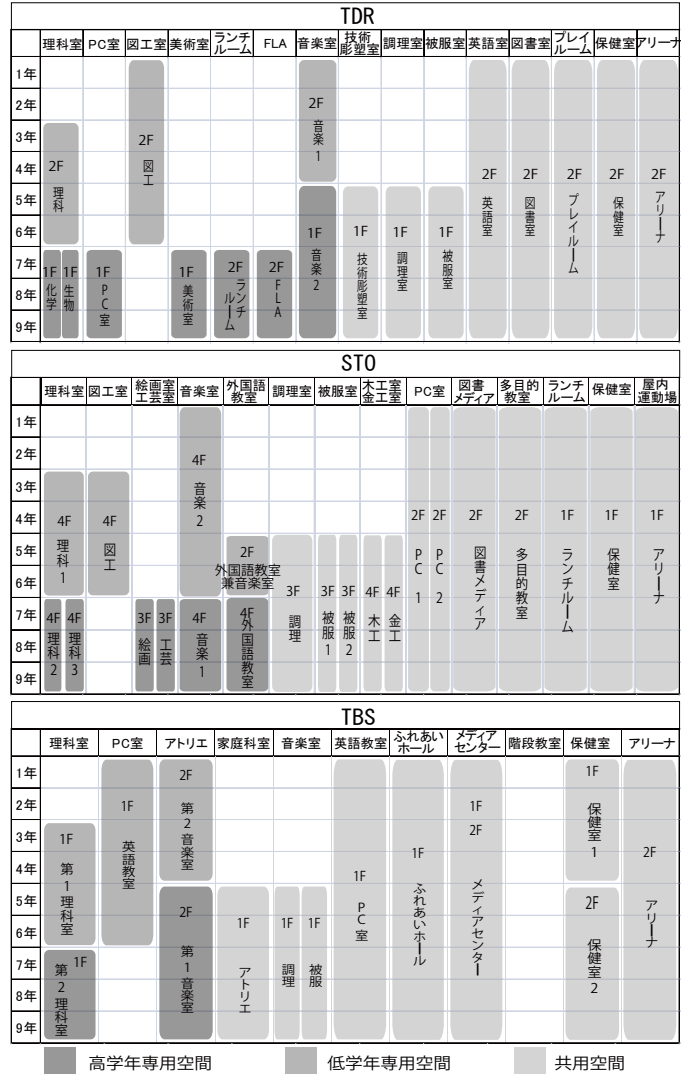


図2. 共用スペースの利用状況

は、理科室が小・中の区切り、音楽室は初等部・中等部という区切り方になっているのがわかる。小中共用されている特別教室は、可変の家具が設置されているPC教室、使用学年が5年生以上に限られる家庭科室、技術室が挙げられる。特別教室以外では、図書室やランチルームが小中で共用されている。小中で共用されていないのは理科室、図工室・美術室が主に挙げられ、共に3年生以上の学年で使用する教室である。TDRとTBSの音楽室では、小中での分離ではなく、1～4年、5～6年という区切りで教室を使い分けている。このことから特別教室において、身体的差異の大きい小学校低学年と中学生は共用されにくく、身体的差異の小さくなる小学校5年生以上で使用される教室で共用されていることが分かる。TDRのPC教室が共用されていない理由

The influence of phisical differene in students of school complex of elementary school and junior high school on share space

NISHIOKA Daisuke, YOKOYAMA Shunsuke, TOKUONO Tetsu

表 1. 共用スペースにおける家具の大きさ

	家庭科室		技術室	PC室	図書室		ランチルーム		音楽室		英語室	美術室		理科室		
	被服	調理			(大)	(小)	(大)	(小)	(大)	(小)		(大)	(小)	(大)	(小)	
TDR	高さ調節	730	800	720	700	630	610	700	580	640	550	700	700	700	800	700
	可動	不可	不可	不可	不可	不可	不可	不可	不可	可(ボルト)	可(ボルト)	可(ボルト)	不可	不可	不可	不可
STO	高さ調節	460	460	420, 350	350-500	370	360	440	300	425	300	450	450	450	430	400
	可動	不可	不可	不可	可(ガス圧式)	不可	不可	不可	不可	可(ボルト)	可(ボルト)	可(ボルト)	不可	不可	不可	不可
TBS	高さ調節	700	850	700	700	700	590	700	590	560	400	560	700	560	850	700
	可動	不可	不可	不可	不可	不可※1	不可※1	不可	不可	可(ボルト)	可(ボルト)	可(ボルト)	不可	可(ボルト)	不可	不可
STO	高さ調節	460	-	460	350-500	450	350	450	350	350	260	350	460	350	460	460
	可動	不可	-	不可	可(ガス圧式)	不可※1	不可※1	不可	不可	可(ボルト)	可(ボルト)	可(ボルト)	不可	可(ボルト)	不可	不可
TBS	高さ調節	800	720	720	700	700	600	720	730	660	640	-	-	-	700	700
	可動	不可	不可	不可	不可	不可※2	不可※2	不可	可	可(ボルト)	可(ボルト)	-	-	-	不可	不可
STO	高さ調節	420	-	460	400-500	440	400	430	450	420	430	-	-	-	420	420
	可動	不可	-	不可	可(ガス圧式)	不可※2	不可※2	不可	可(ボルト)	可(ボルト)	不可	-	-	-	不可	不可
TBS	高さ調節	420	-	460	400-500	440	400	430	450	420	430	-	-	-	420	420
	可動	可動	-	可動	可動	固定	固定	可動	固定	固定	可動	-	-	-	可動	可動

※1…図書メディア ※2…メディアセンター ※3…ふれあいホール ※4…サイドテーブルの高さ ※5…アトリエ(技術室)

□ 小中共用 ■ 小中分離

としては、低学年の普通教室で無線LANを利用した授業が可能でためである。TBSでは、低学年の図工を普通教室で行い、美術の授業でもアトリエを使用するため、他校の技術室のように5年生以上で共用されている。

#### 4. 家具の大きさによる差異

各共用スペースの利用状況と家具の大きさについてその違いを見てみると、図書室やランチルーム、音楽室のように、小学校低学年が使用する場の家具では高さの異なる家具が複数置かれるなどして、身体の大きさに対応した家具が設置されている。また、5年生以上が使用する教室では、小中の共有でも一般的な家具の大きさとなっているのが分かる。小中分離している教室の家具に関しては、使用する学年によって、置かれる家具の大きさが変わっているが、立ち作業が多い理科室や、6人掛けの大きい机は一般的な大きさのものとなっている。このことから、机の大きさは大きく700mm前後のものと550~600mm程度のものにわけられ、1~4年が使用するかどうかによって使い分けがされていることがわかる。また、TBSのふれあいホールや英語教室では使用する家具は全学年共通で、低学年は大きい家具を使用するのに抵抗をもたないと考えられる。

#### 5. 家具の配置による差異

全校で共用されている場でも、配置の仕方によって、同室で活動しているにも関わらず、活動の場が分けられてしまっている例が見られる(図3-1、3-3)。また共用の場として高学年用、低学年用の家具が配置されているにもかかわらず、図3-2では小学生が図書室で活動するなか、中学生が書架の隣にあるベンチを机代わりにして調べ学習をしている。図3-4では、高学年用書架の隣に低学年用の小さい家具が置いてあり、周りで低学年が活動しているにも関わらず、使用している様子が見られなかった。このことから、高学年が低学年用の家具を使用することはほぼ無いが、低学年は低学年用、高学年用とあまり関係なく使用している

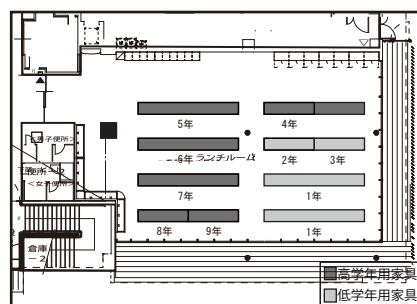


図3-1 ランチルーム(STO)

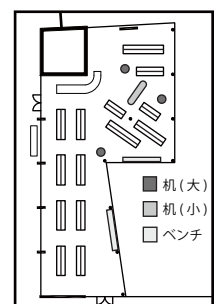


図3-2 図書室(TDR)

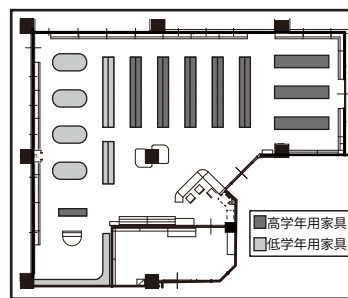


図3-3 図書メディア(STO)

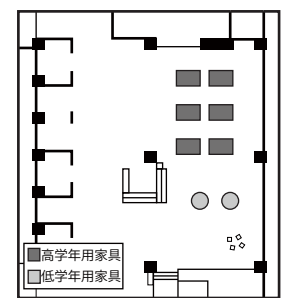


図3-4 メディアセンター(TBS)

図3. 共用スペース家具配置

ことが分かった。

#### 6. まとめ

特別教室は基本的に共用されておらず、家庭科室、技術室とPC教室が共用されており、その他1~9年が使用するような特別教室に関しては、共用されずに学年によって分離されている。また、その分離の仕方は様々で、小・中で区切る場合、1~4年・5~9年で区切る場合が確認された。このことから、身体的差異というもの強く意識されている。しかし、低学年に関しては家具の大きさにあまり関係なく活動している例が見られたりすることから、低学年は使用出来る家具は関係なく使用すると考えられる。逆に高学年になるにつれて、小さい家具の使用が見られなかったことから、低学年よりも高学年用にしつらえた家具の配置を考え、低学年の使用を補助出来るような付属物を設けることが望ましいと考える。

\* 大阪市立大学大学院工学研究科 前期博士課程  
 \*\* 大阪市立大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)  
 \*\*\* 大阪市立大学大学院工学研究科 講師・博士(工学)

Graduate Student, Graduate School of Engineering, Osaka City University  
 Lecturer, Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng  
 Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng